

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

熱帯アンデスにおける伝統農業とその変化：  
中央アンデスを中心に (シンポジウム：  
熱帯地域における経済発展下の土地利用変貌)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山本, 紀夫 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/00008337">http://hdl.handle.net/10502/00008337</a>

## 熱帯アンデスにおける伝統農業とその変化 —中央アンデスを中心に—

山本 紀夫

国立民族学博物館 〒565 大阪府吹田市千里万博公園内

**キーワード** 休閒システム, 市場経済の浸透, 人口移動, 伝統農業, 道路網の発達, 熱帯アンデス

**Traditional Agriculture and Its Changes in Tropical Andes –with a Focus on the Central Andes–** Norio YAMAMOTO *National Museum of Ethnology, Senri Expo Park, Suita, Osaka, 565 Japan*

**Key words** Market economy, Migration, Progress in transportation, Sectoral following system, Traditional agriculture, Tropical Andes

### 1. はじめに

中南米の社会は、16世紀初めから大きな変化を余儀なくされるようになった。いうまでもなく、コロンブスのアメリカ大陸到達に始まるヨーロッパ人たちの影響のせいである。まず、中米ではアステカ帝国、アンデスでもインカ帝国がスペイン人たちの侵略によって崩壊した。このあともスペイン人をはじめとするヨーロッパ人による先住民の酷使や弾圧などにより伝統社会は激変した。それにヨーロッパからもたらされた病気が追い打ちをかけ、先住民社会は多大な影響をこうむったのである。

これは、本稿で対象とする伝統農業も例外ではなかった。中南米の各地にヨーロッパから新しい家畜や作物が導入された。家畜では牛や馬、ヤギ、羊、豚など、作物では小麦や大麦、米などのほか、様々な果実類ももたらされた。やがて、中南米の各地でサトウキビや綿花、コーヒーなどのプランテーション農業も始まった。このプランテーション農業では大量の労働力が必要となり、不足する労働力を補うためにアフリカから数多くの奴隷が連れてこられた。こうして、中南米の社会はもちろんのこと、その農業も大きく変化したのである。

このような状況のなかで、比較的近年まで伝統的な農業を維持してきた地域もある。その代表的な地域が、ここで取り上げようとする中央アンデスの高地部である。中央アンデスはインカ帝国に代表される古代アンデス文明の栄えたところで、その影響が高地部では色濃く残されてきたのである。ところが、近年、この中央アンデス高地部の伝統的な農業

さえも大きな変化を生じてきている。そして、そのような変化は農村社会にととまらず都市部の社会にも大きな影響を与えている。それが、中南米のなかで、とくに本稿でアンデス地域を取り上げようとする理由である。

### 2. 中央アンデスの環境

アンデス山脈は、赤道をこえて南北に約8000kmの長さにとわたって走る、地球上で最長の大山脈である(図1)。また、そこには標高6000mを越す高峰も少なくない。それだけに、そこでは緯度や高度の変化によって自然環境に大きな違いがみられる。とりわけ、緯度の変化による環境の違いが大きい。緯度によってアンデスは一般に北部アンデス、中央アンデス、南部アンデスの3地域に分けられる。

このうち、中央アンデスは、国でいうとペルーからボリビアにかけての地域で、緯度のうえでは熱帯ないしは亜熱帯に位置する。そして、中央アンデスは大部分が熱帯アンデスに位置するせいで、そこでは高地であっても標高のわりに気候が比較的温暖である。このため、中央アンデスでは古くから標高4000mを越す高地まで人間の生活領域となってきた。なお、この高地は緯度が低い一年の気温変化はあまりないが、降雨量は季節によって大きく異なり、明確な雨期と乾期がある。

さて、この高地部こそは、農業をも含めて伝統的な社会や文化がよく残されているところである。アンデスの海岸地帯も古くから灌漑農耕がおこなわれ、それをもとに農耕文化の発達したところであったが、そこは先述したようにヨーロッパ人たちの影

響が大きく、やがてヨーロッパからもたらされた病気などの影響もあって先住民人口の大半が失われてしまったのである。

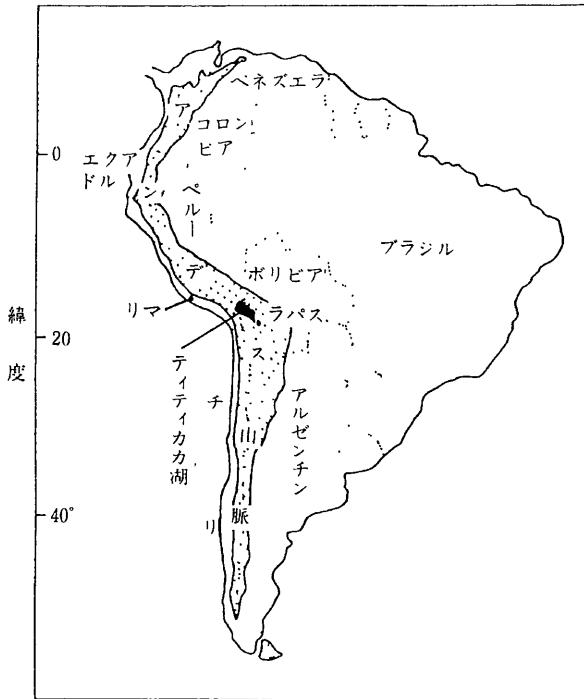


図1 南アメリカ大陸とアンデス山脈

一方、アンデスの高地部ではこのようなヨーロッパ人による影響が比較的小さかった。そこがヨーロッパ人にとって接近が容易ではない山岳地域に位置していたからである。また、多くの先住民人口を擁していた標高3000mから4000mの高地は気温が低く、空気も稀薄であるため、ヨーロッパ人には住みにくかった。この結果、アンデス高地部はヨーロッパ人による影響が小さく、現在にいたるまで伝統的な社会が維持されてきたのである。

とくに、このような伝統的な社会が広くみられるのが、アンデスのなかでもペルーからボリビアにかけての中央アンデスの高地部である。そして、ここではインカあるいはそれ以前からの伝統的な農耕方法を維持している地域も少なくない。たしかに、ヨーロッパから導入された小麦や大麦を栽培している地域もあるが、それは一部でしかない。大部分の地域で見られるのは古くから栽培してきたトウモロコシやジャガイモ、さらに今なおアンデスでしか見られない在来作物などである<sup>17)</sup> (表1)。

また、ヨーロッパから牛の導入とともに伝えられた牛耕もみられるが、中央アンデスの高地では伝統的な踏み鋤を使っている地域が多い。この踏み鋤もインカ時代には使用が知られていたものであるが、現在も当時とほとんど変わらないものが使われてい

表1 中央アンデス高地(標高2000m以上)で栽培されている主要な在来作物<sup>17)</sup>

種類	一般名	現地名	学名
種類及び豆類	トウモロコシ*	maiz	<i>Zea mays</i> (イネ科)
	キノア	quinoa	<i>Chenopodium quinoa</i> (アカザ科)
	カニワ	canihua	<i>Chenopodium pallidicaule</i> (アカザ科)
	センニンコク	achita	<i>Amaranthus caudatus</i> (ヒユ科)
	ハウチワマメ	tarwi	<i>Lupinus mutabilis</i> (ヒユ科)
イモ類	ジャガイモ	papa	(ナス科)[2倍種] <i>Solanum stenotomum</i> , <i>S. goniocalyr</i> , <i>S. phureja</i> , <i>S. ajanhuiri</i> [3倍種] <i>S. chaucha</i> [4倍種] <i>S. tuberosum</i>
	じゃがいも	ruki	[3倍種] <i>S. juzepczukii</i> [5倍種] <i>S. curtilobum</i>
	オカ	oca	<i>Oxalis tuberosa</i> (カタバミ科)
	オユコ	olluco	<i>Ullucus tuberosus</i> (ツルムラサキ科)
	マシュア	mashua	<i>Tropaeolum tuberosum</i> (ノウゼンハレン科)
	マカ	maca	<i>Lepidium meyenii</i> (アブラナ科)
	クズイモ	ajipa	<i>Pachyrhizus ahipa</i> (マメ科)
	ラカチャ	arracacha	<i>Arracacia xanthorrhiza</i> (セリ科)
	ヤコン	yacón	<i>Polymnia sonchifolia</i> (キク科)

\* トウモロコシは中米起源の作物である可能性が高いが、アンデスでも古くから栽培され、固有の品種が生みだされている。

るのである<sup>16)</sup>。とくに、次章で述べるようにジャガイモを中心とする高地での農耕の方法はきわめて伝統的な色彩が濃いものである。

### 3. 伝統的な根栽農耕

先述したように、中央アンデスでは人間の生活領域が高度差にして4000m以上と大きく、そこでアンデスの人々は古くから多様な作物を栽培し、家畜を飼ってきた。そして、そのなかで中心となってきたのはトウモロコシとジャガイモの栽培、そしてリヤマとアルパカなどのラクダ科家畜の飼育であった。図2に示したように、これらの作物栽培や家畜飼育のおこなわれる高度は異なっており、現地での環境区分に従えば、一般にケシュア帯(温暖な低地)でトウモロコシ、スニ帯(冷涼な谷間)で寒さに強いジャガイモなどのイモ類を栽培し、寒さのために農業が困難なプーナ帯(高地の草原)でリヤマ、アルパカを放牧する。

中央アンデスに特徴的な点は、これら3つの主要な生業活動をそれぞれ別々のグループが行うのではなく、世帯なり、集落なり、あるいは地域社会が大きな高度差を利用して、自給する方向で、すべての生業活動を行おうとする傾向の強いことである。実際に、低地でトウモロコシを、中間地帯でジャガイモを栽培し、さらに高地部ではリヤマやアルパカなどの家畜も飼って少なくとも食糧に関しては自給を維持している世帯が少なくない。

この点で、とくに中央アンデスで広くみられるのが、ジャガイモ栽培を中心とする農業とリヤマ・ア

ルパカの放牧を組み合わせた高地適応の生業である。その社会は農牧複合と言ってもよいもので、ここでの食事もジャガイモを中心とするイモ類であり、これを家畜の肉が補うものである。このような農牧複合もまた先スペイン期からの伝統であるが、それは単に食糧の自給という点だけでなく、家畜飼育と作物栽培のあいだにも密接な関係が存在するのである<sup>6,13)</sup>。

実際に、最後のインカ皇女とスペイン貴族のあいだに生まれた混血のインカ・ガルシラーソ・デ・ラ・ベーガ<sup>7)</sup>は、この点について次のような興味ぶかい記録を残している。

「寒さのためにトウモロコシの育たないコリャオ地方(ティティカカ湖周辺)では……人びとはジャガイモやその他の野菜に家畜の糞を施し、それが他のいかなる肥料よりも有効だと言っていた」。

つまり、アンデス高地で農業をおこなうためには家畜の糞が肥料としてきわめて重要なのである。この状況は現在においてもかわらない。中央アンデス高地で調査をおこなった研究者たちも、休閑地で放牧した家畜の糞尿が地力の回復に欠かせないと述べている<sup>2,5)</sup>。筆者が調査をしたペルー、クスコのマルカパタ村でも家畜の糞はジャガイモ栽培に不可欠である。マルカパタ村では標高約3100mから4300mあたりまでジャガイモを栽培しているが、主要な栽培域である標高3800mから4000mでは家畜の糞だけを肥料として与える。しかも、その量は、種イモ1袋に対し肥料としての糞は10袋、ときにこの比率は1対20になることさえある<sup>15)</sup>。

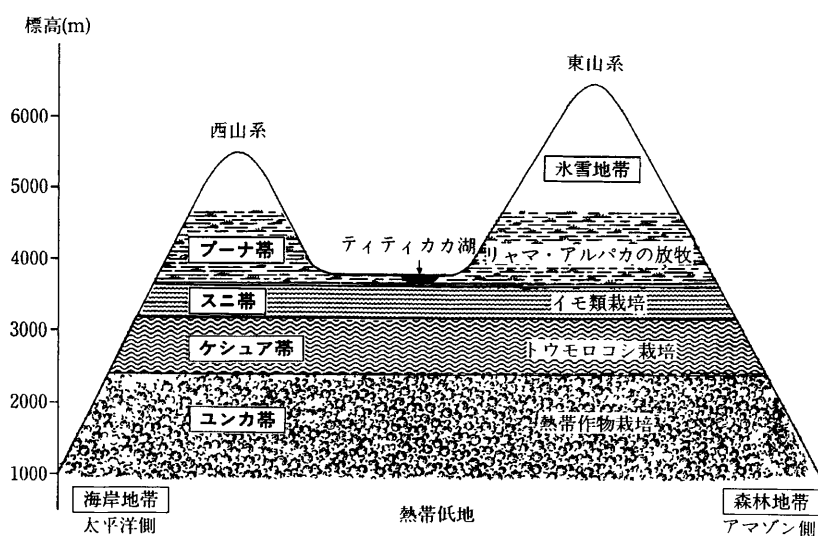


図2 中央アンデスの断面図

この背景には、アンデス高地の土地が肥沃ではなく、むしろ貧弱であるという事実がある。熱帯高地特有の気候、すなわち長い乾期の存在や一日の激しい気温変化、さらに絶対的な気温の低さなどが土壌中の有機物の分解を妨げるからである。また、長い雨期の存在も土壌中の養分を洗い流し、とくに急傾斜地に多い耕地の土壌浸食をひきおこす要因となるのである。

このような土壌の条件に対応して中央アンデスの高地部で発達してきた、もうひとつの農耕技術がある。それはジャガイモ耕地の休閒システムである。つまり、ジャガイモを栽培したあと、その耕地を何年間か休ませ、再び使う方法である。この方法も遅くともインカ時代にはおこなわれていたことが知られており、さきのインカ・ガルシラーソ<sup>7)</sup>もインカ時代の休閒について次のように述べている。

「灌漑されたトウモロコシ畑の他に、水の引かれていない耕地もまた分配され、そこでは乾地農法によって別の穀物や野菜、例えば、パパ(ジャガイモ)、オカ、アニユス(マシュワ)と呼ばれる、非常に重要な作物の種が播かれた。……こうした土地は水不足ゆえに生産性が低いので、一、二年耕しただけでこれを休ませ、今度はまた別の土地を分配する、ということが繰り返された。このように彼らは、循環的に使用することによって絶えず豊富な収穫が得られるよう、やせ地を見事に管理運営していたのである」

この記録に見られるように、中央アンデスの二つの主作物のトウモロコシとジャガイモは栽培される耕地が異なっているだけでなく、その栽培方法も基本的に異なっていた。一般にトウモロコシ耕地は灌漑をほどこして休むことなく毎年栽培されるのに対し、ジャガイモ耕地は1,2年栽培しただけで、あとは休閒するのである。このような休閒システムもまた現在まで伝えられ、中央アンデスで広く見られるのである。

以上、みてきたようにジャガイモ栽培でみられる休閒システムや先述した農牧複合は中央アンデス高地の伝統的な農業を特色づけるものである。このような特色にくわえて、中央アンデス高地では踏み鋤に代表される農具の発達や様々なイモ類の加工技術の発達などもある。これらのことから、筆者は中央アンデス高地における根栽農耕文化圏の存在を提唱したことがある<sup>14,16)</sup>。

しかし、近年、この伝統的な根栽農耕の方法にも大きな変化がみられるようになっていく。とくに、

ジャガイモ栽培と密接な関係をもって発達してきた休閒システムさえも近年急速に変化してきている。そして、その変化は中央アンデスにおける伝統農耕の変化だけではなく、農村社会の大きな変化をも物語っているように思われる。

そこで、以下では、この休閒システムの変化に焦点をあて、その状況とともに、その原因や影響についても検討してみることにしたい。

#### 4. 伝統農耕の変化

##### (1) 休閒期間の短縮

表2は、筆者自身が調査をおこなったペルー南部高地(マルカパタとタキレ)およびボリビア北部高地(アマレテとイルパ・チコ)の4地域でのジャガイモ耕地の休閒システムを示したものである。現在、アンデスでは広くスペイン語が使われているが、マルカパタ、タキレ、アマレテでは今なおケチュア語が、イルパ・チコでもアイマラ語が話されており、その社会や文化はかなり伝統的と言って良いものである。表中のジャガイモ耕地もいずれも個人の耕地ではなく、一般にコムニダと呼ばれる地縁血縁的な色彩の濃い地域共同体の共同耕地である。

しかし、ジャガイモ耕地の休閒システムには地域によって違いが見られる。マルカパタでは、4つの共同耕地はいずれも4年間の休閒期間がもうけられている。2年目の耕地でオカやマメ類を栽培することもあるが、それは耕地全体の一部でしかなく、基本的には4年の休閒期間が守られている。

ところが、このマルカパタ村以外では休閒期間がかなり異なり、全体としては休閒期間が短くなっている傾向がうかがえる。また、輪作期間が長くなるにつれ、休閒期間も短くなる傾向もみとめられる。実際に、マルカパタ以外で4年以上の休閒期間をもうけているのはアマレテ村のルキ用耕地だけであるが、このルキ用耕地は標高4000m以上の耕地にあり、そこで栽培できるのはルキとよばれる耐寒性のきわめて強いジャガイモに限られるのである。

それに対してアマレテ村のもう一つの共同耕地では、ジャガイモ栽培のあと、オカ、大麦、ソラ豆を栽培し、休閒は2年間だけである。これと似ているのが、タキレである。そこでも、ジャガイモを栽培したあと、オカ、ソラ豆、大麦と栽培し、休閒期間はやはり2年間である。これら両地域とマルカパタ村での休閒システムの違いを生み出したのは何であろうか。

その原因の一つとして考えられるのが、人口の増

表2 ジャガイモ耕地の輪作と休閑

地 域	高 度	1 年目	2 年目	3 年目	4 年目	5 年目	6 年目	休閑期間
マルカパタ								
maway	3000~3400m	ジャガイモ	休 閑	休 閑	休 閑	休 閑	ジャガイモ	4 年
chaupimaway	3400~3700m	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
puna	3700~4100m	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
ruki	4100m 以上	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
タキレ	3800~4000m	〃	オ カ	ソラ豆	大 麦	休 閑	休 閑	2 年
アマレテ								
kapana	3500~4000m	〃	オ カ	大 麦	ソラ豆	休 閑	休 閑	2 年
ruki	4000m 以上	〃	休 閑	休 閑	休 閑	休 閑	休 閑	5 年
イルパ・チコ	3800~3900m	〃	キヌア	大 麦	休 閑	休 閑	休 閑	3 年

加にともなう耕地の不足である。マルカパタ村は約1700km<sup>2</sup>の面積があるが、そこに住むのは約6000人と少なく、人口密度は3~4人/km<sup>2</sup>である。それに対して、タキレはティティカカ湖上の周囲約20kmほどの島に約1500人が暮らしている。また、アマレテ村の領域面積については資料がないが、少なくともマルカパタ村より人口はかなり多いという印象もっている。

このことから、おそらくタキレもアマレテも人口の増加にともなう、ジャガイモだけでなく、ほかの作物も輪作するようになったのであろう。そして、その結果として休閑期間も短縮されるようになったのではないか。それというのも、伝統的な技術レベルで食糧増産をはかるためには休閑期間の短縮または輪作システムの導入が手っとり早い方法であると考えられるからである。

しかし、伝統的な方法での施肥は家畜の糞によるものであるが、この糞はすべての作物栽培に使えるほど充分にはない。リヤマやアルパカ、そしてヨーロッパから導入されたヒツジの糞は、いずれも肥料として重要であるだけでなく、燃料としても重要である。そのため、一般に家畜の糞による施肥はジャガイモ栽培だけに限られ、ほかの作物の栽培には肥料を与えない。

この結果、ジャガイモだけでなく、ほかの作物も輪作し、休閑期間の短くなった耕地は次第に疲弊してくる。実際に、アマレテ村の農民もしばしば収量の減少の原因が休閑期間の短縮にあることを口にする。また、その休閑期間の短縮は村の人口の増加に起因することにも言及している。さらに、タキレ島の農民も近年のジャガイモの収量の減少傾向を指摘しており、その最大の原因は休閑期間の短縮にある

という<sup>15)</sup>。

同時に、タキレ島では、ジャガイモの収量の減少は病気のせいでもあり、これも休閑期間の短縮に関係があるらしいという。この病気はセンチュウ(nematode)によるもので、現在アンデスではジャガイモの病気として最も被害が大きく、また駆除が困難なものである。じつは、ジャガイモ耕地の休閑こそはこの病気に対する効果的な方法として知られているが、それにもかかわらず休閑期間が短縮されるようになっているのである。

## (2) 市場経済の浸透

ジャガイモ耕地の休閑システムに変化を与えているのは人口の増加だけでなく、別の要因もある。その大きな要因として考えられるのが伝統社会への市場経済の浸透である。もともとアンデス社会はスペイン人の侵略を受けるまで、貨幣をもたず、市場も商業もなかった、いわば貨幣経済以前の世界であった。そして、その伝統はペルーやボリビアなどの中央アンデスの高地部では比較的近年までつづいていたのである。

ところが、この山岳地帯でも道路網が整備され、それにとまって市場経済が地方にまで浸透するようになった。さきの例では、イルパ・チコがその代表的な地域である。イルパ・チコは、ボリビアの事実上の首都であるラパスから車で1~2時間と近く、ラパスの近郊農村的な性格をもつ集落である。人口も比較的稠密で、おおよそ72km<sup>2</sup>の広さのところに人口が2845人で、人口密度はマルカパタ村の10倍以上の40人/km<sup>2</sup>である。したがって、この人口圧も休閑システムに大きな影響を与えていると考えられるが、それと同時に無視しえないのが市場経済の影響なのである。

たとえば、それは栽培されるジャガイモ品種が少なくなっていることにも示されている。周知のように中央アンデスはジャガイモの原産地であり、そこでは数多くの品種がみられる。また、ひとつの村だけでも数十種類のジャガイモを栽培していることも珍しくはなく、マルカパタでも約100種類のジャガイモを栽培している。ところが、イルパ・チコでのジャガイモ品種は20種類ほどと少なく、しかも、そのなかには改良品種が少なくない。これらの改良品種は市場向けに栽培しているものであるが、このような改良品種は化学肥料を必要とする。つまり、イルパチコでは、従来の家畜の糞だけでなく、一部ではあるが化学肥料、さらには農薬も使うようになっているのである。

このような化学肥料や農薬の使用、さらに改良品種の導入は従来の休閑システムを根本的に変えてしまう可能性をもつ。じつは、中央アンデス本来の生産戦略の特徴は生産性を追求するものではなく、収量は低くとも安定的な収穫を目的とするものであった。アンデス高地部での作物栽培は突然の降霜や干ばつ、さらには病害虫の発生など、つねに収穫が危険にさらされているからである。

したがって、その栽培方法は様々なリスクを回避する方策がめぐらされていた。たとえば、作物の品種の多様化、生産・流通における分散化への志向などがそうである<sup>14)</sup>。ジャガイモ耕地を連作しないで、休閑する方法も病気発生などのリスクを回避するひとつと考えてよいであろう。ところが、ペルーの中部山岳地帯の農村のなかには市場経済の影響で休閑期間を短縮するだけでなく、休閑システムそのものが消滅したところさえある。

その代表的な地域が、ペルーの首都リマ市の近郊農村的な性格をもつフニン県の農村である。ここは、中部山岳地帯に位置していて大部分の農村が標高3000~4000mにあるが、リマ市との交通の便がよく、大部分の農村からリマまで車で数時間で到達することができる。そのため、フニン県の農村では、ジャガイモだけでなく、トウモロコシ、さらに様々な野菜類などもリマの市場に向けて栽培しているところが多い。そして、ジャガイモ栽培では休閑をやめ、化学肥料や農薬を使って、毎年、ジャガイモを栽培している農村が少なくないのである。

こうしてみると、現在、中央アンデスにおける休閑システムにはきわめて大きな変化が生じていると判断される。しかし、このような変化は最近だけではなく、かなり以前から生じていたことも考え

られる。というのも、中央アンデス全体でこの休閑システムを見渡してみると、休閑期間にかなりのバラツキが見られるからである。休閑システムを詳しく調査した研究によれば、休閑期間の長いものでは10年以上というものもあり、短いものでは1年だけのものもある<sup>15)</sup>。また、マルカパタ村でもかつては10年間の休閑期間をもうけていたという情報もある。

このような違いは先述した人口の増加や市場経済の浸透の程度が地域によって異なっていることに起因するのであろう。その意味では、休閑期間の短縮に象徴されるように、中央アンデスの伝統農耕の変化は、程度の差こそあるものの、広い範囲で起こっていると考えられる。しかし、さきに指摘したように休閑システムは病気などの発生を回避する役割をになっていたはずであり、それが変化することで環境の悪化などの問題を生じる恐れがある。実際のところ、すでにアンデスでは半分以上の面積で土壌の浸食や過放牧などによる環境破壊が生じているとの報告もある<sup>16)</sup>。

##### 5. 農村から都市への人口移動—むすびにかえて

以上、中央アンデスの伝統農耕の変化をジャガイモの休閑システムに焦点をあてて検討してきた。その結果、伝統的であるとされるジャガイモ栽培においても休閑期間の短縮にみられるように大きな変化が生じていることが明らかになった。そして、その背景には農村社会での人口の増加や市場経済の浸透の影響のあることを指摘した。また、山岳地域での道路網の拡大、整備がこれらの変化と密接な関係をもっていることも指摘した。

じつは、このような変化は農業だけでなく、リヤマやアルパカなどの伝統的な家畜飼育にも大きな変化を与えている。たとえば、道路網の発達により、これまで荷物輸送のかなりの部分をゆだねていたリヤマの役割が小さくなり、その影響でリヤマの飼育頭数が減少してきている。一方で、アルパカの毛は国際的に評価が高くなり、価格も高騰してきたため、アルパカの飼育頭数は増える傾向にある。さきに指摘したように、リヤマとアルパカの飼育はジャガイモ栽培と密接な関係をもってきたため、これらの家畜飼育における変化も伝統的な農業に大きな変化をおよぼしている。この点に関しては別稿にゆずるとして、このような変化が農村社会に与えている影響を最後に見ておきたい。

冒頭で述べたように、休閑システムの変化は単に

土地利用の変化にとどまらず、農村社会にも大きな影響を与えていると考えられるからである。じつは、アンデスにおける農村社会を構成する基礎となるのは先述したコムニダとよばれる共同体であり、この地域共同体の共同耕地でジャガイモは栽培されている。そして、このジャガイモ栽培で休閒システムを可能にしてきたのが耕地の利用に対する共同体の様々な規制である。

ところが、この休閒システムの消滅あるいは大きな変化は共同体による規制の喪失または変化をとまなう。これは、逆の可能性もある。つまり、共同体の規制の弱体化または変化が休閒システムの消滅または変化をもたらしている。いずれにせよ、このような変化は伝統的な農村社会に大きな変化を与える可能性をもつ。たとえば、耕地の私有化がその代表的なものである。

この耕地の私有化は可能性にとどまらず、すでにアンデス各地で生じている。そして、この現象によって農地を拡大する農民がいる一方で、農地をまったくもたない農民も増加している<sup>9)</sup>。このような農民のなかには、村を離れ、砂金やゴムなどの採取のためにアマゾン低地に出稼ぎに行くものが少なくない。また、近年、増加しているのが、都市への移住である<sup>10)</sup>。

たとえば、ボリビアでは事実上の首都であるラパスや近年発展をとげつつあるアンデス山麓に位置するサンタクルスに周辺の農村部から大量の人口移動がおこっている<sup>11)</sup>。また、ペルーでは山岳地帯の農村部から海岸地帯の都市部への移住が顕著である<sup>9,11)</sup>。とりわけ、ペルーの首都であり、海岸地帯に位置するリマへの人口集中は近年激しくなっている(図3)。それは、リマの人口動態にもはっきりとあらわれている。リマの人口は1940年に60万人であったが、それが1970年には400万人に急増している。そして、この急増した人口の大半が山岳地域からリマへの移住者に起因するとされるのである<sup>3)</sup>。

彼らの大半はリマ市周辺の「プエブロ・ホーベン(pueblo joven)」とよばれるスラム街に集中して住んでいる。このプエブロ・ホーベンの人口がリマ市全体の人口に占める割合も急増している。リマ市の人口のうち、1956年にプエブロ・ホーベンの人口が占めていた比率は約10パーセントほどであったが、それが20年後の1976年には76パーセントにまで急増しているのである<sup>3)</sup>。このような都市への急速な人口流入が様々な社会問題をひきおこすことは、あらためて論じるまでもない。

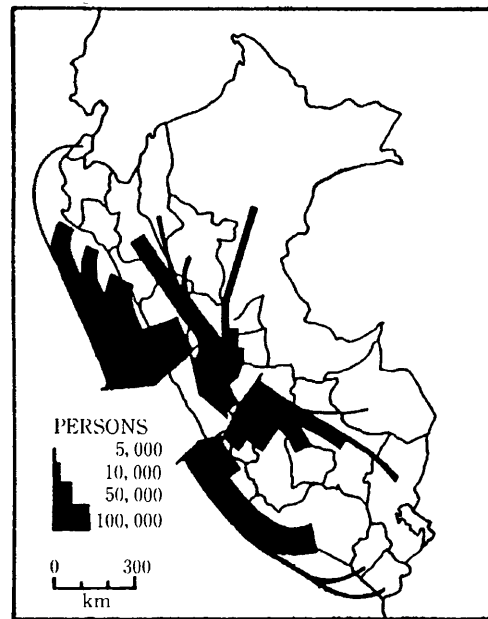


図3 リマへの人口移動 (1961年)<sup>3)</sup>

とにかく、この山岳地帯の農村部から都市部への人口移動はその後減少するどころか、むしろ増えつつけている。もちろん、このような農村から都市への大量の人口移動は、伝統的な農業の変化だけに原因が求められるわけではない。山岳地帯の農村部と都市部でのインフラ面での様々な格差も無視しえない要因である。そして、その背景には山岳地帯への道路網の浸透などをおしての都市部からの情報の流入などがある。

さきに、アンデスにおける道路網の整備が農村部への市場経済の浸透を促したことを指摘したが、これは農村側からみれば都市部へのアクセスが容易になったことを意味する。このような状態も農村から都市部への人口移動に拍車をかけている。つまり、農村部から都市部への農民の移住には様々な要因が関係しているが、そのなかで、きわめて大きな要因として考えられるのが道路網の発達なのである。

これは、現在なお、伝統的な農耕をおこなっているとされる地域がいずれも交通の不便な地理的に隔離された農村であることにも示されている。一方、このような状況のなかで中央アンデス全体を見渡したとき、広い地域で今なおインカ以来、あるいはそれ以前からの伝統であるジャガイモの休閒システムがおこなわれているのは興味ぶかいことである。その背景には、この休閒システムがアンデスの農村共同体の組織と強くむすびついていること、この休閒システムがアンデス高地の自然環境を持続的



に利用する上で効果をあげてきたことなどの事情が存在する。

しかし、本稿で指摘したように、その休閒システムさえも変化し、なかには消滅してしまったところもある。この事実は、長く伝統的な方法を維持してきた中央アンデス高地の農業が急速に変化をとげている兆しのように思われる。いいかえれば、休閒システムの変化および消滅は中央アンデスにおける伝統農耕の大きな変化を象徴するものにほかならないと筆者は考えている。

### 引用文献

1. BROWMAN, D.L. (ed.) 1987 Arid Land Use Strategies and Risk Management in the Andes: A Regional Anthropological Perspective. Westview Press (Boulder).
2. USTRED, G. 1973 Puna Zones of the South Central Andes. Paper presented at the Annual Meeting of the American Anthropological Association (New Orleans).
3. ESCOBAR, M.C. and C.M. BEALL 1982 Contemporary patterns of migration in the central Andes. Mountain Research and Development 2: 63-80.
4. GODOY, R. 1984 Ecological degradation and agricultural intensification in the Andean highlands. Human Ecology 12: 359-383.
5. GUILLET, D. 1981 Agrarian ecology and peasant production in the Central Andes. Mountain Research and Development 1: 19-28.
6. GUILLET, D. 1983 Toward a cultural ecology of mountains: The Central Andes and the Himalayas compared. Current Anthropology 24:561-574.
7. INCA GARCILAZO DE LA VEGA (インカ・ガルシラ
- ーソ・デ・ラ・ベガ) 1609 牛島信明訳 1985 インカ皇統記I 岩波書店(東京) pp.498.
8. 木村秀雄 1988 リスク処理・相互扶助・歴史変化—アマレテ生産システム—. IESR 24 亜細亜大学経済社会研究所(東京).
9. MILLONES, J. 1982 Patterns of land use and associated environmental problems in the Central Andes. Mountain Research and Development 2: 49-61.
10. ORLOVE, B.S. and R. GODOY 1986 Sectoral fallowing systems in the Central Andes. J. Ethnobiology 6: 169-204.
11. SMITH, C. T. 1971 The Central Andes. In: Latin America: Geographical Perspectives. (BLAKEMORE, H. and C.T. SMITH eds.) Methuen Press (London).
12. WINTERHALDER B., L. ROBERT and T. BROOK 1974 Dungs as an essential resource in a highland Peruvian community. Human Ecology 2: 43-55.
13. YAMAMOTO, N. 1985 The Ecological Complementarity of Agro-Pastoralism: Some Comments. In: S. MASUDA, I. SHIMADA and C. MORRIS (eds.) Andean Ecology and Civilization University of Tokyo Press (Tokyo) 85-99.
14. YAMAMOTO, N. 1988 Papa, llama, y chaquitaclla. Una perspectiva etnobotánica de la cultura Andina. En: S. MASUDA (ed.), Recursos Naturales Andinos, 111-152. Universidad de Tokio (Tokio).
15. 山本紀夫 1988 ジャガイモ栽培と休閒. 農耕の技術 11: 64-100.
16. 山本紀夫 1993 中央アンデスの根栽農耕—踏み鋤をめぐって. 佐々木高明編「農耕の技術と文化」, 161-186. 集英社(東京).
17. 山本紀夫1996 熱帯アンデスの環境利用—ペルー・アンデスを中心に—. TROPICS (熱帯研究) 5: 161-184.